

論文概要

女子だけの環境で行われるノンフォーマル教育プログラムは、 ジェンダー課題を克服できるか ーガールスカウト日本連盟の事例からー

学籍番号：18MD0214

氏名：矢後 千紘

1. 研究の目的と方法

本論文の目的は、ガールスカウトを「学校外で少女が女子だけの環境で活動するノンフォーマル教育」と定義し、ガールスカウト日本連盟がこれまでやってきた教育をジェンダー教育と捉え、そのプログラムを検証・評価・考察することである。「ジェンダー教育」とは、本研究では「全ての性別の人々に、どんな資質・能力も抑圧しないで求める教育」と定義する。特にガールスカウトを事例として扱うことから、主に「従来少女・女性には望ましくないとされてきた資質・能力も、抑圧される必要はないという前提に立った教育」のことを指す。また、ジェンダー課題を直接的に扱うプログラムについても「ジェンダー教育」の一部とする。

文献調査では、対象団体である公益社団法人ガールスカウト日本連盟の今日にいたるまでの歴史と日本における女子教育の歴史について概観した。あわせて、日本の教育政策の中で「21世紀に求められる資質・能力・コンピテンシー」と考えられてきた具体的内容や日本の10代少女・女性を取り巻く環境、ジェンダー論等について、統計資料、調査報告書、論文、書籍、インターネット等の資料に基づき調査した。事例調査では、ガールスカウトのプログラムを2000年以降に受けた女性を対象に、事前アンケート、半構造化インタビューを実施した。彼女たちが語った個別の経験を分析することで、ガールスカウトのプログラムは彼女たち自身にどのような影響を与えているのか、ジェンダー教育としての視点から洞察し、帰納的に導くことを試みた。研究課題への接近方法として、本研究の中心は質的調査である。

2. 論文の構成

第1章 序論

- 1-1 研究の背景
- 1-2 研究の目的
- 1-3 研究の方法
- 1-4 論文の構成
- 1-5 ガールスカウトに関わる用語など

第2章 分析の枠組み ～何をジェンダー課題ととらえるか～

- 2-1 セクシズムの経験
- 2-2 ジェンダー・トラックの形成
- 2-3 セクシャルマイノリティの人々が置かれている状況

第3章 ガールスカウトの位置づけとそれを取り巻く状況

- 3-1 日本におけるこれまでの女子教育史の流れ
- 3-2 女子教育をめぐる議論
- 3-3 女子だけの環境で行われるノンフォーマル教育の可能性

第4章 ガールスカウトはジェンダーとどう向き合ってきたか

- 4-1 団体結成にいたるまでの経緯
- 4-2 2000年の教育プログラム改訂時に目指されたガールスカウトで育てたい女性の資質・能力・コンピテンシー
- 4-3 ガールスカウト内におけるジェンダー課題への取り組み

第5章 ガールスカウト教育プログラムに参加した女性たちの声

- 5-1 調査及び分析の方法
- 5-2 調査結果

第6章 考察

- 6-1 セクシズムの経験
- 6-2 ジェンダー・トラックの形成
- 6-3 セクシャルマイノリティの人々が置かれている状況

第7章 結論と課題

- 7-1 結論
- 7-2 今後の課題

引用・参考文献一覧

論末資料

図一覧

表一覧

謝辞

3. 論文の概要

本論文は7章で構成される。

第1章は、研究の背景と目的、研究の方法と構成を説明した。

第2章では、男女一緒の環境で教育を受けることによって、①セクシズムを経験する、②ジェンダー・トラックが形成されてしまう、③セクシャルマイノリティの人たちが安心して学べない、の3つのジェンダー課題を挙げ、それに基づいて女子教育における①セクシズムの経験、②ジェンダー・トラックの形成、③セクシャルマイノリティの人々が置かれている状況、という3つの分析の枠組みを提示した。

第3章では、ガールスカウトの教育プログラムとは女子教育全体の中でどのような位置づけなのか、そしてそれを取り巻く状況とはどのようなものかを論じた。第1節では、日本の女子教育(主に公教育)の歴史を見ると、必ずしもジェンダー課題の克服に寄与してきたとは言えないことを示し、第2節では、現代の公教育においては、考え方の面でも数での面でも女子だけの環境で女子教育を行う機会確保の難しさを述べた。それらの流れを受けて第3節では、ガールスカウトの場合その特徴から、近年ジェンダー課題は克服しやすいと考えられてきたことを説明した。

第4章では、ガールスカウトの教育プログラムを評価するにあたり、そのプログラムが作られた背景と経緯を整理した。第1節では、団体結成にいたるまでの経緯を述べた。第2節では、2000年に改訂したプログラムの背景にある新しい価値観の提示を指摘した。第3節では、ジェンダー課題を直接扱う取り組みがガールスカウト内でも生まれてきたことについて説明した。

第5章では、実際にガールスカウトの教育プログラム(2000年の改訂以降のプログラム)を受け、これまでになんらかの職業選択を経験した女性たちを対象に実施した調査及び分析結果を示した。アンケート・インタビューを行う調査協力者の選定においては、事例に関する豊富な情報を持つ可能性のある対象者や、自由な語りを聞き取るためすでにガールスカウトを離れてしまっている対象者を筆者が意図的に選択した。本調査では、年齢、現在のガールスカウトとの関わり、プログラムを受けた場所、職業に関して多様な属性を網羅するように考慮した。調査の結果、女性たちの声から、ガールスカウトのプログラムでジェンダー課題を克服できる可能性は大いにあるが、いくつかの点に相当注意しなければ、ジェンダー課題を再生産してしまう可能性があるということも明らかになった。

第6章では、第5章で語られた女性たちの語りから、分析の枠組み3点についての考察を示した。1点目のセクシズムの経験については、ガールスカウトが女子の可能性を最大限に伸ばせるような環境をつくろうと努力しているものの、①プログラム内容や②指導者の声かけによってセクシズムを経験し、ジェンダー課題を再生産してしまうことが分かった。2点目のジェンダー・トラックの形成について、ガールスカウトの教育プログラムの中では、主体性や自分の意志決定を迫られる場面が多く、物事に対して自分の意見を持つような訓

練がなされているということがわかった。一方で、女子だけの場でプログラムを受けても、いわゆる女性が苦手と言われているような分野についての教育を意識して行わなければ、同様にジェンダー・トラックが作られるということが明らかになった。3点目のセクシャルマイノリティの人々が置かれている状況については、女子だけの環境でプログラムを受けることにより、プログラム受益者の力がのびのびと発揮できる一方で、「女子」「女性」というラベリングが余計に強化されることによって、性自認が女性ではなかったり、性的指向が異性ではないガールスカウト内部のマイノリティを苦しめている可能性があることが指摘された。また、トランスジェンダーとカミングアウトしているガールスカウト経験者にはインタビューすることができず、当事者としての話を聞くことができなかったことから、内部のマイノリティの包摂性に課題が感じられた。

第7章では、結論を示した。以上に述べてきた通り、ガールスカウトのプログラムからは女子の力を伸ばす可能性はあるものの、いくつかの課題があることも明らかになった。ガールスカウト内部でジェンダー課題の再生産が行われないう工夫を考えていくことは重要である一方で、男性と男性に強く影響を受けてしまっている社会全体が変化しなければ、問題の根本は解決せず、そちらへのアプローチも同時に行っていく必要があるということが今後の課題である。